

令和 3 年 11 月 25 日

Daigas ガスアンドパワーソリューション株式会社
代表取締役社長 後藤 暢茂 様

日本鳥学会
会長 尾崎 清明

(仮称) 苫東厚真風力発電事業に対する事業中止要望書

日本鳥学会は、鳥学の発展および鳥類保全への学術的貢献を目的とする団体です。現在、貴社が計画し、環境影響評価を行っている（仮称）苫東厚真風力発電事業につきまして、令和 3 年度日本鳥学会総会決議（令和 3 年 10 月 22 日承認）により、以下の事由から、鳥類保全の見地から事業の中止を要望いたします。

なお、以下の図 4 及び図 6 には、希少鳥類保全の観点から部外秘扱いとすべき情報が示されています。情報の流出や漏洩回避のため、図 4 及び図 6 の取り扱いにご留意され、複製についてはご遠慮いただけますようお願いいたします。

記

(1) 鳥類の生息地としての重要性

本事業の対象事業実施区域（以下、計画地という。図 1、図 2）がある苫小牧市東部から厚真町及びむかわ町にまたがる勇払原野は、ラムサール条約登録湿地であるウトナイ湖を有し、計画地より西側に隣接するウトナイ湖・弁天沼を含めた区域と、東側に隣接する入鹿別川から鶴川流域に至る区域は重要野鳥生息地（IBAs）及び生物多様性の保全の鍵になる重要な地域（KBA）に選定されている。これらの区域は国際 NGO のバードライフ・インターナショナルと日本野鳥の会などの取り組みによって、国際的な基準に則って選定されており、希少鳥類を中心とした野生動植物の重要な生息地であり、世界の生物多様性保全にとっても重要な地域であると国際的に認知されている（日本野鳥の会 2010）。計画地自体は IBAs や KBA を含んでいないが、隣接する地域の開発はこれらの区域の生物相や生態系に影響を与える可能性が高く、勇払原野を一体として保全することが必要である。

また、勇払原野は北海道中央部（以下、道央とする）では、まとまった面積（約 14km²）のある唯一の湿地環境を有する（国土地理院）。1920 年前後には、苫小牧から札幌を経て石狩川中流域付近までの道央地域には湿地が広く存在していたが、現代ではほとんど消失し、勇払原野が唯一の場所になっている（図 3）。勇払原野でも 1960 年代から土地造成工事が実施されたものの、その後は長年放置されたことによって自然が再生し、現在は市街地の隣接地域としては非常に豊かな動植物相が形成されている（石城 2015）。鳥類相は特に豊かであり、これまでに 277 種が観察されている（石城 1987）。計画地内には、ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、タンチョウ、シマクイナ、ヘラシギ、オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、ハヤブサ、アカモズといった国内希少野生動植物種および天然記念物に指定されている鳥類や、ウズラ、サンカノゴイ、シロチドリ、オオジシギ、ウミネコ、ハイタカ、トラフズクなど準絶滅危惧種を含めた環境省及び北海道のレッドリスト掲載種が多数生息・繁殖しており、ガン・ハクチョウ類やシギ・チドリ類の渡りの際の移動経路とも重なっている。

これらのことは、本事業配慮書に対する北海道知事意見や環境大臣意見および経済産業大臣意見、さらに専門家等へのヒアリングでも述べられている。また、環境省の環境アセ

スメント環境基礎情報データベースシステム（EADAS）に掲載されている「風力発電における鳥類のセンシティブリティマップ（陸域版）」においても、計画地は重要種が分布する、注意喚起レベル A3 のメッシュに含まれている。

（2）風力発電施設が永続的に鳥類に与える悪影響

計画地を含む勇払原野は、豊かな鳥類相を有する地域であることから、風力発電施設（以下、風車という）が建設されれば、既に国内でも希少種を含む多くの鳥類種で明らかにされているバードストライクや、障壁効果（鳥類が風車を避けることによって最適な移動ルートが利用できなくなること）が発生する可能性が極めて高い。

障壁効果の影響を受けやすい鳥類では、ねぐらと採食場所や営巣地との間など、高い頻度で利用する空間に風車が建設されると、従来の好適な生息地を放棄し、質の劣る生息地に移動することがある（Drewitt & Langston 2006）。また、障壁効果が恒常的あるいは累積的に生じると、飛行に係るエネルギー消費が増大し、繁殖成功率や生残率の低下を招くおそれが指摘されている（Masden *et al.* 2010）。

これらの観点を踏まえ、以下に特に懸念すべき種に対して本事業の与え得る影響について意見を述べる。

タンチョウ（国内希少野生動植物種、国の特別天然記念物、環境省絶滅危惧Ⅱ類）

事業予定地周辺は、環境省の環境研究総合推進費（H24～H26）の成果として公表されているタンチョウの潜在営巣適地地図において、利用確率の高い場所として示されている（研究課題名【4D-1201】シマフクロウ・タンチョウを指標とした生物多様性保全-北海道とロシア極東との比較 https://www.env.go.jp/policy/kenkyu/suishin/kadai/syuryo_report/h26/pdf/4D-1201.pdf）。実際に、本計画地および周辺には 2011 年よりタンチョウが生息・繁殖するようになり、2017 年と 2021 年には計画地内で繁殖した（図 4）。2017 年には雛 1 個体が育ち、その個体は現在も計画地内で観察されることがある。2021 年は 2 個体の雛が順調に育ち、7 月中旬以降は計画地外東側に行動圏を移している。この 2021 年の繁殖成功事例は、新聞及びインターネット上で広く報道された（図 5：朝日新聞 2021a, 朝日新聞 2021b）。

タンチョウではこれまでにバードストライクの発生事例はないが、電線等への衝突事例は多く確認されていることから（住吉 1989）、電線や回転する風車ブレードなどの視認しづらい人工物への衝突リスクは潜在的に高いと考えられる。また、ツル科の鳥類では、生息地放棄の要因となる障壁効果が生じやすいとされている（Hötter *et al.* 2006）。国外では近縁種のクロヅルで障壁効果が生じていることが確認されており（Munoz 2008a, Portulano 2006）、国内でもタンチョウと同属のナベヅルおよびマナヅルの渡りの時期に障壁効果が生じたことが長崎県で確認されている（浦 2015）。これらのことから、計画地内に風車が建設されると、計画地内外に生息するタンチョウがいなくなったり、繁殖成績が低下したりする危険性が高いと考えられる。

また、環境省は 2013 年にタンチョウ生息地分散行動計画を策定し、道内に給餌に依存しない複数個体群を創出することを目標としている（環境省 2013）。本計画地内とその周辺域では、タンチョウが道東以外で初めて給餌に頼らず通年定着して繁殖を繰り返し、次第に観察個体数が増えている（須田 2018、大森 2019、ネイチャー研究会 in むかわ 未発表）。タンチョウ個体群の保全において営巣地域の拡大は極めて重要な要件であり、本事業の実施は現在生息している個体に悪影響を及ぼすだけでなく、将来的な繁殖適地を喪失させる可能性があることから、問題は甚大といえる。

以上のことから、計画地及び周辺域は、タンチョウの道央圏への分布回復の足掛かりとして極めて重要であり、既存の繁殖地の喪失はもちろんのこと、バードストライクや障壁効果による悪影響も考えられることから、当該事業の実施は受け入れがたい。

オジロワシ（国内希少野生動植物種、国の天然記念物、環境省絶滅危惧Ⅱ類）

オジロワシでは海外、国内とも数多くのバードストライクが発生しており（浦 2015）、国内では、2021年3月末までに少なくとも69個体の風車衝突事故が確認され（環境省釧路自然環境事務所記者発表資料 <http://hokkaido.env.go.jp/kushiro/03.pdf>）、本種個体群の保全上、大きな問題となっている。

当学会会員の調査によれば、計画地周辺には3つがい以上のオジロワシの繁殖地があり、少なくともそのうちの1つがいは、繁殖期の行動圏内に計画地が含まれる場所で営巣している。さらに、毎年2月に実施されているオオワシ・オジロワシ合同調査グループによるカウント調査では、計画地に隣接する鵠川下流域からむかわ海岸にかけて、オジロワシと同様に保護指定種であるオオワシとを合わせて例年10個体前後が確認されている。また、計画地に含まれる厚真川河口や海岸部は、採餌場として海ワシ類に利用されている（図6）。

オジロワシは国内外において、風車への衝突リスクが非常に高い種であることがわかっているほか、営巣地周辺における風車建設が繁殖成功率の低下や個体群の衰退を招くことも報告されている（Dahl *et al.* 2012）。個体群を圧迫する主要因となるこれらの影響を回避するためには、繁殖期であれば営巣地から半径3km以内の風車建設を避ける必要があるが（Krone & Treu 2018, LAG-VSW 2007, MUGV Brandenburg 2012）、少なくとも上述した1つがいは、計画地から3km以内に営巣している。一方、国内ではとくに越冬期にオジロワシの風車衝突事故が多く確認されており（白木 2012）、繁殖する留鳥のオジロワシや出生幼鳥に加え、渡り鳥であるオオワシ、オジロワシの越冬集団に対しても配慮が必要である。風車の塗装等による衝突予防策には十分な効果が確認されていないことから、少なくとも高頻度な飛行や利用の見られる場所での風車建設は回避されるべきである。

チュウヒ（国内希少野生動植物種、環境省絶滅危惧ⅠB類）

2020年時点での日本全国のチュウヒの繁殖個体数は136つがいと推定されており、北海道全域には117つがい、そのうち勇払原野周辺に20つがいと推定される（日本野鳥の会 2020）。計画地には7つがいと推定され、これは日本全国の総繁殖個体数の5%、勇払原野の地域個体群の35%を占め、風車建設による悪影響が生じた場合には、その地域個体群、ひいては日本の繁殖個体群の存続に対して大きな脅威になりかねない。

チュウヒについては、国内ではバードストライクが生じている事例は報告されていないものの、生態が近い近縁種のヨーロッパチュウヒやハイイロチュウヒ、ヒメハイイロチュウヒではスペイン（Rivas *et al.* 2004, Canizares 2008, Munoz 2008b・2008c・2008d, Munoz *et al.* 2009, Ruiz 2008）やアメリカ（Erickson *et al.* 2001, Johnson *et al.* 2001, Smallwood & Thelander 2004, Kingsley & Whittam 2007）、ドイツ（Dürr 2004, Kingsley & Whittam 2007）、アイルランド（Wilson *et al.* 2015）でバードストライクが確認されている。また、浦ほか（2020）では、チュウヒがオジロワシ等の外敵を追い払う時や繁殖期のディスプレイフライト時、日の出後の旋回上昇時、雌雄ペアでの飛行時に風車に衝突する可能性が高くなる高度で飛行することが多く、繁殖期のなわばりの範囲内に風車が建設されている場合には、チュウヒのこれらの行動により、バードストライクが発生する危険性が高くなることを指摘している。これらより、チュウヒは風車への衝突リスクが潜在的に高い種であると考えられる。さらに、Senzaki *et al.* (2017) は、勇払原野で繁殖するチュウヒのつがい数および巣立ち雛数は、巣のある湿地の周囲2km以内の採食地面積と正に、人工構造物面積と負に関係することを示している。また、最近の研究ではチュウヒ類に対する風車建設による生息地の消失の影響は、バードストライクによる影響に匹敵するかそれ以上であることが示唆されている（Fernández-Bellon 2020）。

これらのことから、計画地内に風車が建設されると、バードストライクのほか、計画地内外に生息する複数ペアのチュウヒが消失したり、繁殖成績が低下したりする危険性が極めて高いと考えられる。

ガン類・ハクチョウ類

計画地周辺の厚真町やむかわ町は、主にウトナイ湖や弁天沼を埒とする春の渡り中継地として重要な場所であり、マガン（国の天然記念物、環境省準絶滅危惧）を中心に数万羽単位のガン類が利用している。さらに、宮島沼やその周辺など石狩平野を中継地とするガン類が渡り時に通過する玄関口となっており、日本に生息するガン類の重要な渡りルート上にあたる（宮林 1994、Takekawa *et al.* 2000）。同地はマガン以外にも、亜種ヒシクイ（国の天然記念物、環境省絶滅危惧Ⅱ類）および亜種オオヒシクイ（国の天然記念物、環境省準絶滅危惧）の多数が集結し（宮林 1994）、近年は、約 40 年に及ぶ羽数回復事業で個体数が増加してきたシジュウカラガン（国内希少野生動物種、環境省絶滅危惧ⅠA類）とハクガン（環境省絶滅危惧ⅠA類）の重要な中継地となっている（シジュウカラガン：先崎 2012、呉地・須川 2021、ハクガン：日本雁を保護する会 2021）。先崎（2012）では、この地域の海岸部から内陸にかけての農耕地や水田、牧草地がガン類にとって重要な餌場となっており、厚真町内のいくつかの沼が埒となっていることや、海岸線を渡り移動する個体がいることなどが述べられている。

マガンやハクチョウ類などの大型鳥類は、細かい羽ばたきができず空中での飛行操作性が低いため悪天候時の風車の回避が困難で、衝突リスクが高い種である（Gove *et al.* 2013）。海外ではマガンを含むガン類で多くのバードストライクが発生している（Rees 2012）。また、風車からの半径が平均 373m（146～559m）の範囲での生息地放棄が報告されているほか（Hötter *et al.* 2006）、障壁効果も生じやすく（Hötter *et al.* 2006）、ガン・ハクチョウ類の移動経路上に風車を建設し、障壁効果が生じたことは国内でも確認されている（Ura *et al.* 2017）。

一方、マガンが風車のローター高として想定された高度 120m を超えるためには、飛び立ち地点から 4,000m 程度の距離が必要であることが明らかにされており（環境省 2010）、マガンのねぐらや採食場所から半径 4,000m 以内に風車を建設すると、バードストライクまたは障壁効果が発生する可能性が高い。近年、風車はさらに大型化しており、より長距離のバッファエリアが必要と考えられる。計画地周辺において、ガン・ハクチョウ類は風車建設予定地から 4,000m 以内にある地上を利用していることから、風車建設後に障壁効果またはバードストライクの発生が予測される。

これらのことから、本事業はガン類、ハクチョウ類に対し、バードストライクのほか生息地放棄や障壁効果などの悪影響をもたらす可能性が高いと予測され、特に計画地周辺を中継地として利用してきたマガン、ヒシクイ、保護対策により復活し始めたシジュウカラガン、ハクガンの個体群の存続に重大な影響を与える可能性がある。

他の重要種

この他に、国内でバードストライクの事例があるオオワシ、ハイタカ、ハヤブサ、オオジシギ、ウミネコの生息が計画地で確認されている（浦 2015、図 6）。

(3) 要望

以上のことから、風車の建設が上に述べた希少鳥類に与える影響は甚大であると予測され、当該地域は鳥類保全の観点から風車建設には不適切であり、風力発電事業候補地から除外されるべきである。さらに、環境影響評価では希少種以外の鳥類に対する評価が行われないが、計画地に生息するすべての鳥類が、この貴重な道央の湿地生態系を構成する重要な要素といえる。ある種の生息状況の変化が希少種を含む他の鳥類種や、ひいては生態系全体に影響を与え得るという観点から、あらゆる鳥類に対する保全措置がとられるべき場所であり、風車基数の削減や設置地点の変更等では影響の回避は不可能である。したがって、本事業計画全体を中止することを強く要望する。

以上

引用文献（アルファベット順）

- 朝日新聞. 2021a. 風力発電計画地でタンチョウ繁殖. 2021年7月12日夕刊西部本社版記事.
- 朝日新聞. 2021b. 風力計画地でタンチョウひなスクスク 日本西端の繁殖地. 2021年7月12日発信. <https://digital.asahi.com/articles/ASP7D3R5GP77ULBJ00Z.html> (2021年7月12日閲覧)
- Canizares, D. 2008. Plan de seguimiento faunístico del parque eólico de Cerro Vicente y ampliación. Informe Annual 2006-2007.
- Dahl, E. L., Bevanger, K., Nygård, T., Røskoft, E. & Stokke, B. G. 2012. Reduced breeding success in white-tailed eagles at Smøla windfarm, western Norway, is caused by mortality and displacement. *Biological Conservation* 145: 79-85.
- Drewitt, A. L. & Langston, D. H. R. 2006. Assessing of the impacts of wind farms on birds. *Ibis* 148: 29-42.
- Dürr, T. 2004. Vogelverluste an Windenergieanlagen in Deutschland Daten aus der zentralen Fundkartei der Staatlichen Vogelschutzwarte im Landesumweltamt Brandenburg. Germany.
- Erickson, W. P., Johnson, G. D., Strickland, M. D., Young Jr, D. P., Sernka, K. J. & Good, R. E. 2001. Avian Collisions with Wind Turbines: A Summary of Existing Studies and Comparisons to Other Source of Avian Collision Mortality in the United States National wind coordinating committee (NWCC) resource document:1-62.
- Fernández-Bellón, D. 2020. Limited accessibility and bias in wildlife-wind energy knowledge: A bilingual systematic review of a globally distributed bird group. *Science of The Total Environment*, 140238.
- Gove B., Langston, R. H. W., McCluskie, A., Pullan, J. D. & Scrase, I. 2013. Wind farms and birds: an updated analysis of the effects of wind farms on birds, and best practice guidance on integrated planning and impact assessment. Royal Society of Protection for Birds and BirdLife International.
- Hötker, H., Thomsen, K. M. & Jeromin, H. 2006. Impacts on biodiversity of exploitation of renewable energy resources: the example of birds and bats facts, gaps in knowledge, demands of further research, and ornithological guidelines for the development of renewable energy exploitation. Michael-Otto-Institut im NABU, Bergenhusen.
- 石城謙吉. 1987. 勇払原野一帯の鳥類相. 北海道大學農學部 演習林研究報告, 44(2): 689-713.
- 石城謙吉. 2015. 勇払原野の自然と歴史. 野鳥 2015年4月号: 22-23.
- Johnson, G. D., Erickson, W. P., Strickland, M. D., Good, R. E. & Becker, P. 2001. Avian and bat mortality associated with the initial phase of the Foote Creek Rim Windpower Project, Carbon County, Wyoming. WEST, Inc., 32 p.
- 環境省. 2010. 平成21年度渡り集結地衝突影響分析業務報告書. 環境省自然環境局, 東京.
- 環境省. 2013. タンチョウ生息地分散行動計画. 北海道地方環境事務所 釧路自然環境局事務所, 釧路.
- Kingsley, A. & Whittam, B. 2007. Les éoliennes et les oiseaux: Revue de la documentation pour les évaluations environnementales. Service canadien de la faune. Environnement Canada.
- 国土地理院. 日本全国の湿地面積変化の調査結果.
<https://www.gsi.go.jp/kankyochiri/shicchimenseki2.html> (2021年5月13日閲覧)
- 呉地正行・須川 恒 編. 2021. シジウカラガン物語—しあわせを運ぶ渡り鳥, 日本の空にふたたび!. 京都通信社.
- Krone, O. & Treu, G. 2018. Movement Patterns of White-tailed Sea Eagles near Wind Turbines. *JWM* 82: 1367-1375; DOI: 10.1002/jwmg.2148.
- LAG-VSW. 2007. Abstandsregelungen für Windenergieanlagen zu bedeutsamen Vogel Lebensräumen sowie Brutplätzen ausgewählter Vogelarten. *Berichte zum Vogelschutz* 44:151-153.
- Masden, E. A., Haydon, D. T., Fox, A. D. & Furness, R. W. 2010. Barriers to movement: Modeling energetic costs of avoiding marine wind farms amongst breeding seabirds. *Marine Pollution*

- Bulletin 60:1085-1091.
- 宮林泰彦. 1994. ガン類渡来地目録第1版. 雁を保護する会. 若柳, 宮城.
- MUGV Brandenburg. 2012. Tierökologische Abstandskriterien für die Errichtung von Windenergieanlagen in Brandenburg (TAK).
- Munoz, R. A. 2008a. Informe anual del seguimiento ambiental. Parques eolicos ECYR. Parque eolico "Rio Almodovar". Informe ano 2008.
- Munoz, R. A. 2008b. Informe anual del seguimiento ambiental. Parques eolicos ECYR. Parque eolico "Zarzuela". Informe ano 2008.
- Munoz, R. A. 2008c. Informe anual del seguimiento ambiental. Parques eolicos ECYR. Parque eolico "Hinojal". Informe ano 2008.
- Munoz, R. A. 2008d. Informe anual del seguimiento ambiental. Parques eolicos ECYR. Parque eolico "El Ruedo". Informe ano 2008.
- Munoz, R. A., Garcia, V. & Barrios, L. 2009. Parque eolicos La Herreria y Pasada de Tejada. Informe Anual 2008.
- 日本雁を保護する会. 2021. 「東アジアにおけるハクガン *Anser caerulescens* の復元計画」に関する資料集. <http://www13.plala.or.jp/Snowgs/sgmenu.htm> (2021年5月22日閲覧)
- 日本野鳥の会. 2010. 野鳥保護資料集第27集-IBA白書2010. (公財)日本野鳥の会, 東京.
- 日本野鳥の会. 2020. 絶滅危惧鳥類「チュウヒ」の全国繁殖つがい数が明らかに. 2020年12月10日プレスリリース.
- 大森 健之介. 2019. 勇払郡におけるタンチョウ (*Grus japonensis*) の繁殖期の行動圏利用と食物資源の関係. 酪農学園大学 環境共生学類 環境動物学研究室 2018年度卒業論文.
- Portulano. 2006. Programa de Seguimiento de Avifauna del Plan de Vigilancia Ambiental del Parque eolico de Las Aldehuelas. Tercer informe semestral. Junio 2006.
- Rivas, J. L., Albero, J. C., Mercadal, M., Sampietro, F. J. & Pelayo, E. 2004. Plan de seguimiento ambiental del parque eolico Tardienta. Informe Anual 2003.
- Rees, E. C. 2012. Impacts of wind farms on swans and geese: A Review. *Wildfowl* 62:37-72.
- Ruiz, J. V. 2008. Plan de seguimiento ambiental del parque eolico Dos Pueblos, Informe Parcial.
- 先崎理之. 2012. 胆振地方東部のガン類. みんなでマガンを数える会 25周年記念誌: 103-106.
- Senzaki, M., Yamaura, Y. & Nakamura, F. 2017. Predicting off-site impacts on breeding success of the marsh harrier. *The Journal of Wildlife Management*, 81(6), 973-981.
- 白木彩子. 2012. 北海道におけるオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の風力発電用風車への衝突事故の現状. 保全生態学研究 17: 85-96.
- Smallwood, K. S. & Thelander, C. G. 2004. Developing Methods to reduce bird mortality in the Altamont Pass Wind Resource Area, Final Report, PIER-EA Contract no 500-01-019.
- 須田桂子. 2018. 勇払郡におけるタンチョウ (*Grus japonensis*) の繁殖期の行動圏利用. 酪農学園大学 環境共生学類 環境動物学研究室 2017年度卒業論文.
- 住吉 尚. 1989. 釧路のタンチョウ-保護の歴史と現状. 世界の動物 分類と飼育 10-II (ツル目) (監修: 黒田長久, 森岡弘之): 121-124. 東京動物園協会, 東京.
- Takekawa, J. Y., Kurechi, M., Orthmeyer, D. L., Sabano, Y., Uemura, S., Perry, W. M. & Yee, J. L. 2000. A Pacific spring migration route and breeding range expansion for Greater White-fronted Geese wintering Japan. *Global Environmental Research* 4: 155-168.
- 浦 達也. 2015. 風力発電が鳥類に与える影響の国内事例. *Strix* 31: 3-30.
- Ura, T., Kitamura, W. & Yoshizaki, S. 2017. Case examples of barrier effects of wind farms on birds in Japan. Conference on Wind energy and Wildlife impacts 2017 Book of Abstracts: 246-247.
- 浦 達也・長谷部 真・平井千晶・北村 亘・葉山政治. 2020. 繁殖期のチュウヒが風力発電施設の建設により受ける影響とその行動-日本野鳥の会サロベツ湿原チュウヒ研究グループ. 自然保護助成基金助成成果報告書 28: 50-57.
- Wilson, M., Fernández-Bellon, D., Irwin, S. & O'Halloran, J. 2015. The interactions between Hen Harriers and wind turbines. WINDHARRIER FINAL PROJECT REPORT.

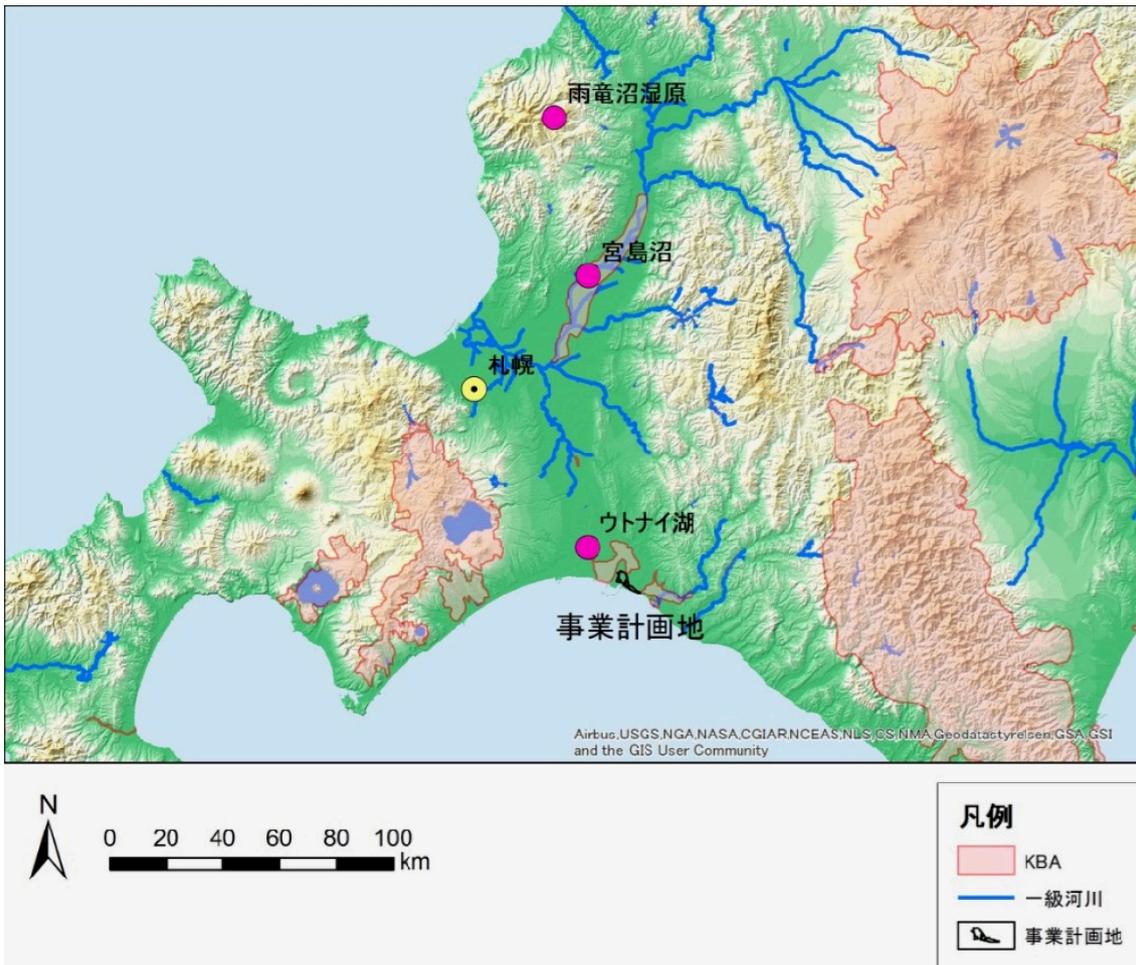


図 1. 事業計画地の位置.

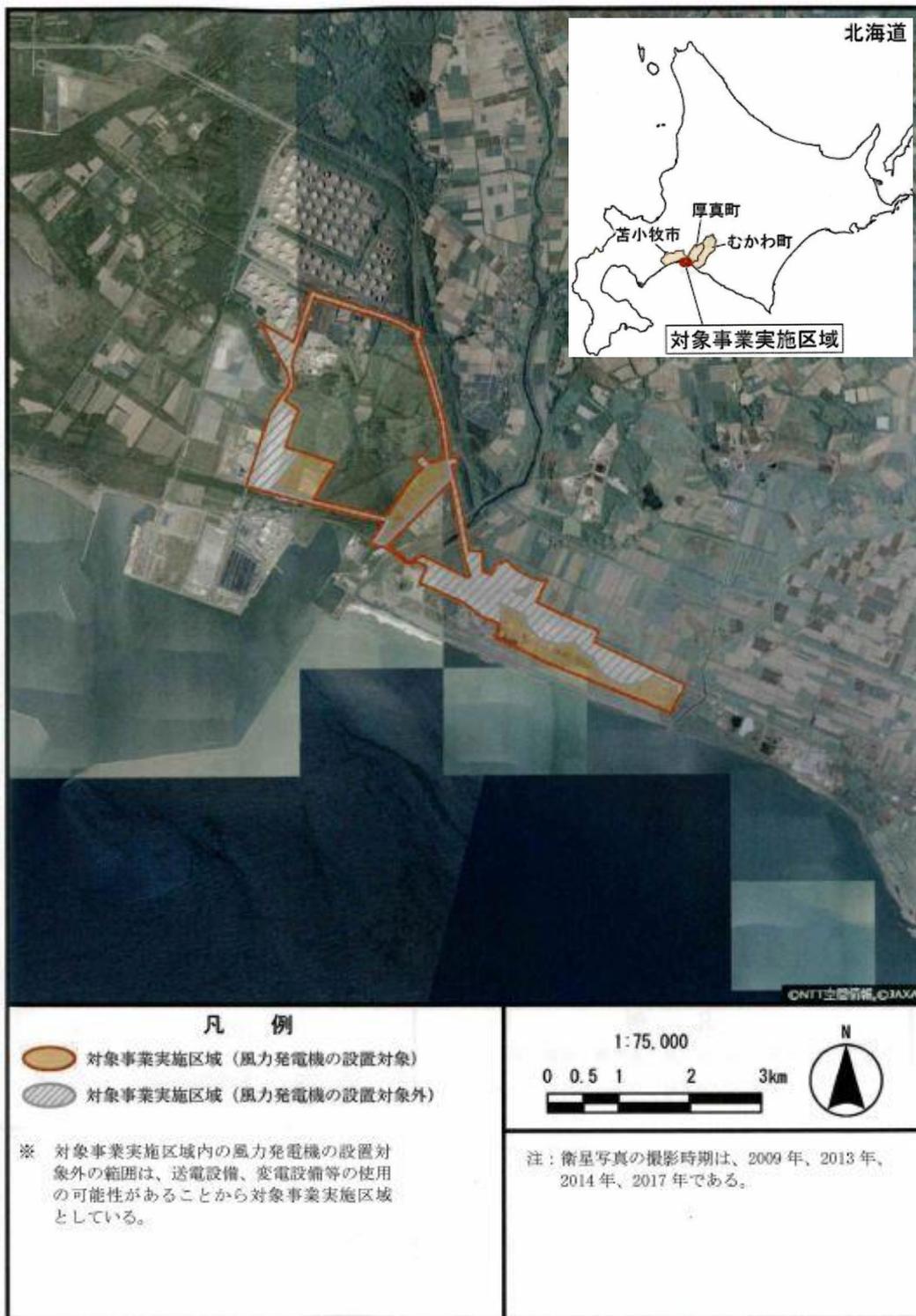
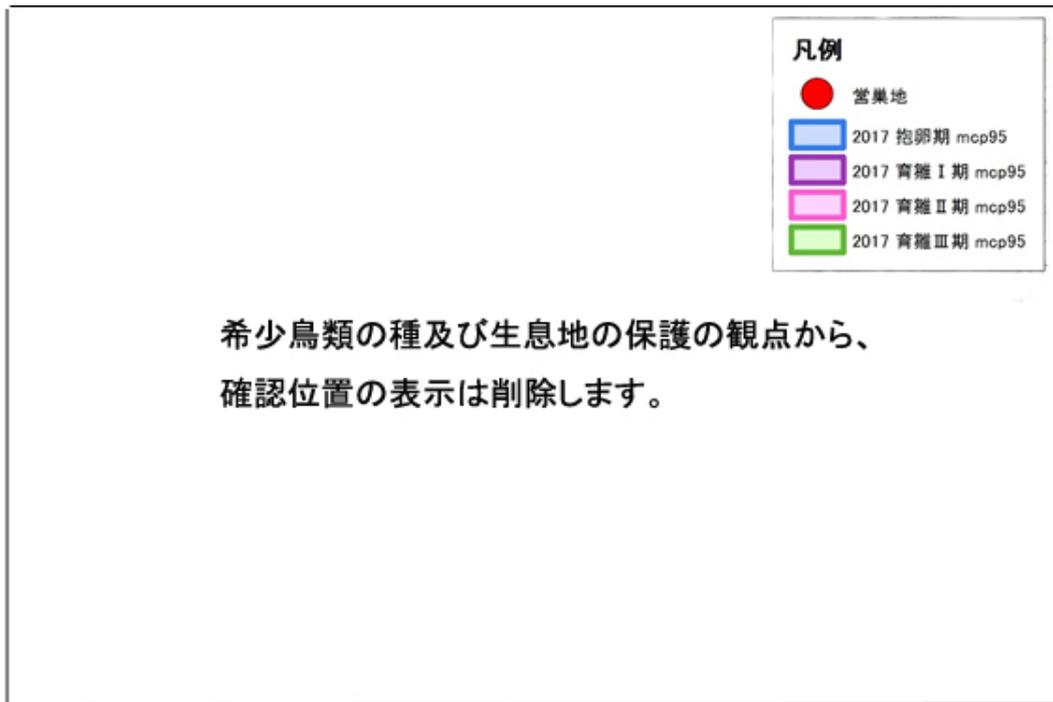


図 2. 事業計画地（対象事業実施区域）の位置。（仮称）苫東厚真風力発電事業環境影響評価方法書の図 2. 2-1 (1) 及び図 2. 2-1 (2) を引用して作図。

a)



b)

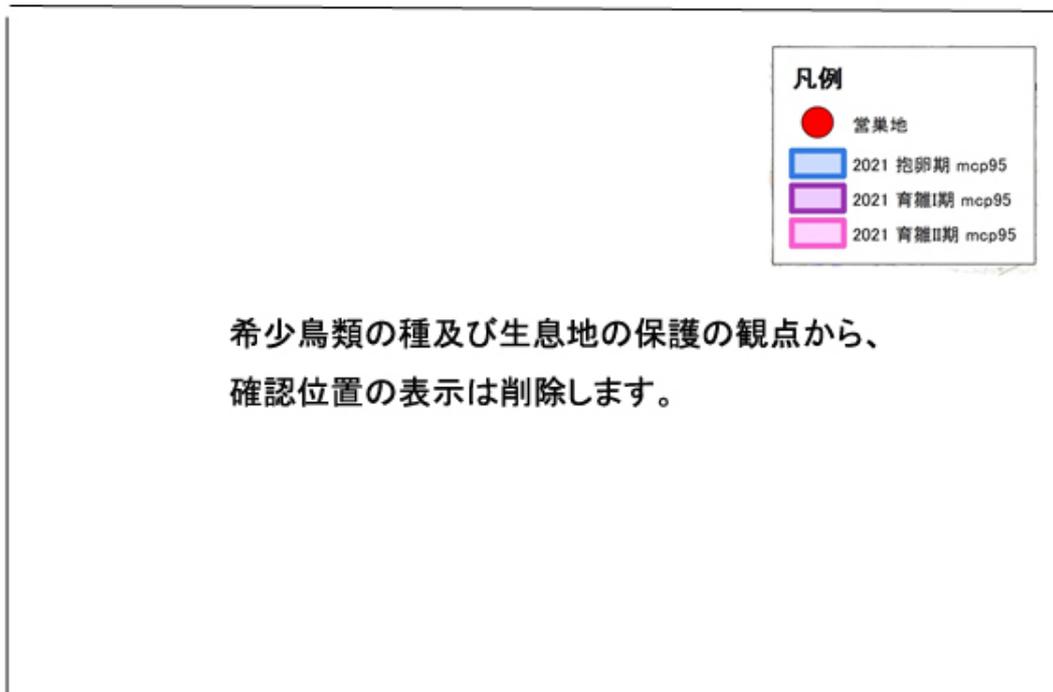


図 4. タンチョウの a) 2017 年と b) 2021 年の事業計画地内の営巣地および繁殖期前半の 95%最外郭行動圏。両年とも家族群は抱卵期～育雛 II 期（約 2 ヶ月齢）まではほとんど計画地内で生活している。a) は須田（2018）、b) はネイチャー研究会 in むかわの未発表データに基づき作図。

注意：この図につきましては、希少鳥類の種及び生息地の保護の観点から、複製配布は禁止願います。

北海道で大坂ガスのグループ企業が進める風力発電所の計画地内で、国の特別天然記念物タンチョウの繁殖が確認された。貴重な繁殖地を守るべきだとし、日本野鳥の会などが計画の中止を求めている。

日本野鳥の会によると、繁殖が確認されたのは、北海道苫小牧市からむかわ町にかけて広がる湿地の一角。地元的一般社団法人「タンチョウ研究所」と「ネイチャー研究会 in むかわ」の調査班が、抱卵やひなの世話をするタンチョウの様子を空撮した。ドローンを使い、十分に離れた距離から撮ったという。

現場は、大阪ガスの子会社が大型の風車10基程度を建てる「苫東厚真風力発電事業」の計画地にあたる。大阪ガスによると、法令に基づく自然保護地域などには指定されておらず、2

風力発電計画地でタンチョウ繁殖

北海道の湿地 野鳥の会など中止求め

2021.7.12.

朝日(夕)

西部本社版

卵を抱いているとみられるタンチョウ。十分な距離を取った上でドローンから撮影し、トリミングした。調査班提供



026年5月にも施設の稼働を
目指しているという。

一時絶滅したと考えられていたタンチョウは、保護活動で数が回復しつつある。道内には、世界全体の半数を超える約1800羽がすむとみられる。生息地は道東部が中心で、今回の繁殖地は道内での分布の西端の一つ。今年4月に見つけたペアを見守っていたところ2羽が孵化

し、子育てが続いているという。

日本野鳥の会の田尻浩伸・自然保護室長は「多くの人が100年かけて復活させてきた鳥が分布を広げる最前線という価値をきちんと考えてほしい」と話す。

大阪ガス側は、取材に対し、「今後の調査などで科学的知見に基づき影響を評価していく」「地元の理解を得られるよう丁寧に説明させていただく」と回答した。

計画については昨年8月、環境アセス法に基づき「重大な環境影響を回避できない場合は見直す」という内容の環境相意見が出ている。当時は計画地でのタンチョウの繁殖は確認されていなかった。ただ、繁殖地であっても計画がすぐに中止されるわけではないという。

(小坪遊)

図5. 事業計画地内でのタンチョウ繁殖成功を報じる新聞記事 (朝日新聞西部本社版 2021年7月12日付夕刊)

- チュウヒ(2018年WBSJ調査)
- アカモズ(2020年WBSJ調査)
- アカエリカイツブリ(先崎 2013)
- ⇄ ガン類移動コース(ねぐら⇄採食地))
- オオワシ・オジロワシ採食地
- (サンカゴイ、クイナ、ヒメクイ、タンチョウ、
- ハヤブサ(周辺で繁殖可能性)
- ウスラ、オオジシギの繁殖地)※含む、過年度

希少鳥類の種及び生息地の保護の観点から、
確認位置の表示は削除します。

図 6. 事業計画地及び周辺での希少鳥類の繁殖地等 (日本野鳥の会 未発表)

注意：この図につきましては、希少鳥類の種及び生息地の保護の観点から、複製配布は禁止願います。

連絡先

日本鳥学会事務局

〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 115 公益財団法人山階鳥類研究所気付 浅井芝樹

電話番号：04-7182-1101 E-mail: asai@yamashina.or.jp